《随想》 波の音

柳田　義一

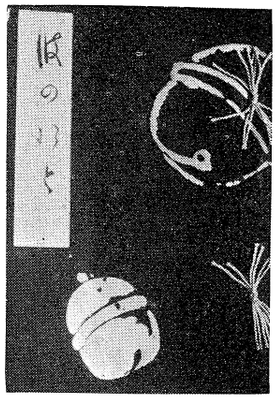
一、嵐の中

先人とおのれとの胸像の成る
をよろこびて
おほけなや　おのがふたりのかほ
かたち　されともうれし千代にの
こらん

よね子

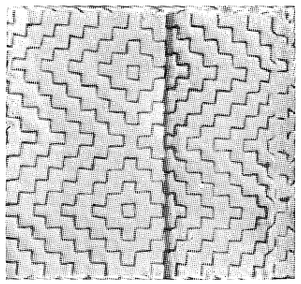
この歌は去る昭和十二年十二月十五日に鈴木家の恩顧を亨けた人々、当時の神鋼社長田宮嘉右衛門氏等五百数名が、先代岩治郎さんお家様との胸像を贈ったのを喜ばれた心境そのままである。この翌年昭和十三年五月六日午後二時これらの歌を遺して鈴木よね刀自は狭心症の為雨の音する塩屋の一室に八十七才を一期として稀に見る大往生を遂げられた。

「お家さんが亡くなりはった」この日の悲報に集まる人々で本邸は潮のような混雑を呈した。神戸市民で鈴木を知らぬ者はない。世界の貿易産業界にも神戸の鈴木の名は忘られない。その名と富すべてといってよい程のものが、よね刀自と云う一女性の力になるものであった事は、古い新しいを論ぜず日本女性のすべてが女の力として考えねばならぬ幾多の教えを遺している。お家さんは嘉永五年八月姫路市米田町漆問屋西田仲右衛門氏の三女として生れ、明治七年先代鈴木岩治郎氏に嫁ぎ明治二十七年夫君の歿後、二代目岩治郎氏岩蔵氏の二児を抱えて、貿易の業を継いで活躍時代に入った。十五万の資産は日清、日露の両役を経て、更に欧洲大戦の波にのり年十億の貿易商となった。



ナス紺地に銀の鈴を二個配置したお家様歌集〝波のおと〟

大戦後大正九年の財界反動、昭和二年のパニック致命的な台銀取引停止に至る大きな曲線を描いて塩屋の邸に余生をおくる身となってからは朝早く起きてはお孫さん達と庭の散歩、草花造り、折りふし謡曲を愉まれ又和歌に興ぜられ、夏は釣、絶えず側近の方との五目並べ等の、この静かな生活の内にわが児同然の店の郎党から贈られた胸像をつくづく眺めてさきの歌を詠まれた。



お家様手ざしフキンお暇の時いつでも1針ずつさしておられた姿が浮ぶ（来客に進呈された）

しかし大きな富と名のみが「お家さん」の尊称にはならぬ「お家様」とて女である。その苦しみも楽しみもすべてが妻として母としてのお家さんであったことを述べよう。

二、俚謡

姫路の地に古くからのこる俚謡に

「わが恋に硯のおすみ（墨）深い浅いを客とするくらしするのもといちゆえ」

といちとは亭主「くらう」とは墨に苦労をかけた文句である。

この俚謡は人こそ知らぬお家さんにとって忘られない思出の若い日の歌で、晩年の「先人とおのれとの胸像」を詠まれた歌と云い想夫の綿々たる情緒が偲んでいるのである。

俚謡「硯の恋」は三味線の糸にのる唄、若き日のよねさんもその時は棹とり初々しい島田を傾け爪弾をせられたであろう。

先人とは勿論先代主人である。しかし俚謡の「といち」にあたる人は先人とはことなっている。それが今は亡きよねさんだけの歌である。

「といち」さんに当る人は誰かと探索すればこれは意外お家さんの若き日の哀話でもあった。

姫路市米田町一七仏壇漆塗師屋号丹羽屋西田仲右衛門氏の三女として生れた（嘉永五年八月仲秋名月の日）頃から繰り拡げねばならない。

父の仲右衛門さんは若き頃から丹波の山の漆取りだった。塗り物産地の姫路の塗師屋へ月に一、二回丹波の山奥から三升入りのまげ籠を肩に草鞋を踏んで米田町「塗師惣」こと福田惣平さんの店先に荷を下したものであった。ただの漆取りだったがその律義さに惚れた惣平さんが仲右衛門さんを見込んで女房おりよさんともども丹波を出て姫路で塗師職をやってはと勧め「塗師惣」とは同じ並び、十軒と離れぬ家に屋号も丹波屋と名乗り初めたのがお家さんの生れた家である。

仲右衛門さんはせっせと働き店も主家におとらぬ繁昌となり、おりよさんとの中に松蔵、竹蔵のお家さんの兄と文之助、幾太郎の外の弟のほかに娘二人合わせて六人の子福者になった。お家さんの物心つく時には分限者ではなけれど「とうさん」と呼ばれ、やがて娘盛りには器量よし心立てよしお裁縫たしなみの三味の音もよし、姉さん二人と共に近所での評判の娘さんだった。ただし後の話にもなる、からだの大きかった事と外の女性に見ることの出来ぬ剛気な気構えはその時分からである。

婿えらびの噂が真実になって恩義のある福田家塗惣の次男原田惣七さんへ輿入れその原田家から惣七さんの妹えみさんが丹波屋西田家の次男竹蔵さんへ嫁いだ。花嫁御寮に二組の若夫婦が揃った事とて米田町かいわいは評判の噂が立った。この時が惣七さんを流行歌の「といち」になぞらへ三味の音も静かな塗師屋の奥にそねまれるほどの夢の日々が続いた。

若しこの倖がそのままにつづいていたら後の世にのこす鈴木十億の富も「ヨネスズキ」と片仮名の名ものこらず城下町の埋れた塗師屋のお家さんで終られたであろう。

しかし人の世は将に賽王の馬に似て明日をも知れぬ運命に支配される事は今も昔も変りがない。

（つづく）

満洲小麦の欧洲向輸出の思い出

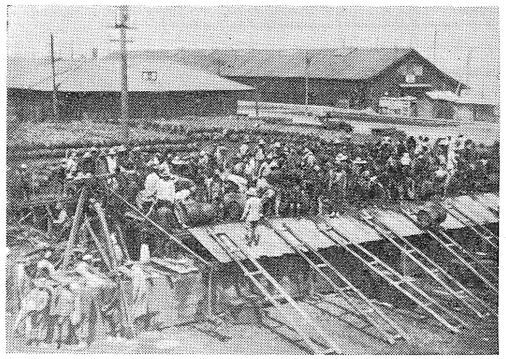
田中　実

「たつみ」の編輯に不断の配慮して居られる沢村亮一さんから、米騒動当時の、外米配給第一線の係員の一員としての思い出を書けとのお話がありましたが、是まで人様に読んで頂く様なものを書いた事もなく、又是と云った資料も持って居らぬので二の足を踏みながら、何うせ思い出を書き綴るなら、幾度も採り上げられた米騒動当時の体験よりも、寧ろ終生忘れる事の出来ぬ程大きな商売であった。「満洲小麦の欧洲向け輸出」の思い出を当時の担当者の一員として綴り合わせてはと思い、具体的な資料もないが古い記憶を喚び起しつつ当時関係の有った方々にも聞き合せ、偶々見付かった当時手製の積取船の写真及他より拝借した写真を眺めながら書いたので、正確を失した点が多々あると思うので其のつもりで御読み願い度い。

第一次欧洲大戦終了（大正八年六月講和条約締結）直前の欧洲各国は食糧不足依然甚しく、ロンドン支店は高畑誠一支店長の采配の許、一騎当千の社員が活動、砂糖に麦粉に将又小麦、大豆、油脂類の買付、売込に全力を傾注して居ると聞いた当時の事であるが、大正九年晩春神戸本店麦粉部（主任者篠原正次氏）より満洲小麦の引合あり、戦後諸商品価格暴落、一種の恐慌状態を呈した時であり、買付易しと考えたので大連支店で試に五千屯を引受けた処（相当冒険的であったが）相当有利と認めたためか追駈け五千屯注文して来た。過去に於て数千屯も纏った輸出記録もないので第一回の五千屯の買付は華商祐昌源（満洲各地で製粉工場を経営）を動員、全力を傾注した結果幸い予想外順調に運んで居ったから追加の五千屯も引受け、祐昌源の外にハルピンに地盤を持つロシヤ人特産商ソウスキン商会を利用し買付に専念した。後日両店のため一席設けた時の写真などもまだ手許にある。其頃に成って三井、大倉（日清油坊）も買付に掛ったが鈴木商店が全力を挙げて買付けつつある時であり、手も足も出ず鈴木独走の有様であった。其後引続き神戸本店経由ロンドン支店より注文あり、通算すると大正九年初夏より大正十年初春迄約十一カ月に亙り三十余万屯の小麦を成約し、大連港より欧洲数港向け順次積出したのであるが、満鉄当局者は大豆輸送も一段落し貨車が昼寝して居る閑散期に長春大連間の全線

を一万車（一車三〇米屯）が走り、運賃約四百三十万円を挙げ恵比寿顔だったと聞いたのであるし、後日次期に備えての貨車の修理がおくれ転手古舞をしたとも云われた。

一方此為替（ℓは神戸にて発行メーツレンートで神戸向に取組んだ）を正金銀行に持込んで居ったが特殊関係のある台湾銀行が正金に独占されるのを無視出来ぬとでも考えたのか大正九年晩秋と記憶するが大西某氏を大連に派遣し正隆銀行本店内に出張所を開設し為替の買取りを初めたのを見ても其為替金額が当時としては相当巨額であった事を説明して居ると思うのである。因に当時神戸本店への仕切値は記録を持たぬ（探せば有るかも知れぬが）のでウロ覚えであるが一屯当りfob大連百一、二十円、結局総為替金額は三千数百万円であった。当時神戸より応援に来て呉れた丹治友城君より最近頂いたメモの中に「大正十年頃日野誠義さんより、諸経費一切を差引いた純利益が約五百万円あったと聞いた」と。是は勿論神戸本店のみのものと思われる。却説此小麦の買付もさる事ながら積出が大変であって夫れ迄に篠原さんが大きな商売に成ると考えたのか逸早く岡本弘記君（小生⊖少年時代からの友人）を応援に派遣し呉れ更に中川宇市君が来連したが一カ月余り後岡本君が帰神したためとても手が足らず夫れを充足するため主として輸出の応援のため本店より丹治友城、伊藤重孝、船渡貞七の諸君が長期出張して来て呉れた。此頃丹治君の語る処に依ると五、六月の出張予定が十一カ月位に成ったと斯の如く手が揃う迄の大正九年夏の第一回積出の際は川崎のストックボート（金子直吉氏が立役者と成りモリス米国大使と交渉の結果成立した日米船鉄交換協約に依り輸入した鉄材で造った船舶）四五隻が一度に来



航、大連港外で沖待ちする程船積が急がれ、是等の配船及其後の積取船は専ら村上孝造君が村上弘一君外船舶部員の協力の許に本店と緊密な連絡、適切な処置を採って呉れたので積出は順調に運んだのである。然し其間の苦労も並大抵でなく第一船の積荷終了直後（三、四隻は沖待ち中）大連では未曽有の集中豪雨に襲われ山県通りは河川と化し横断出来ぬ有様で、埠頭に集積した野積小麦に濡損が生ずる等テンヤワンヤで其手当に支店員を総動員しても手が足りず、幸機械装置の定期的修理のため操業を一時休止中の鈴木油肪の日本人従業員の急援を得て、手入れ、船積作業の促進に努めたが支店員中（小生も）日射病に罹る者数人出た程である。又其繁忙期に不幸にも合宿舎に赤痢患者続出し社員十名余り避病院に収容されたので合宿住いの森下、村上、田中が隔離されれば忽ち支障を来すからとて此三名が老虎灘所在の千松館別荘に逃避せしめられ日々大連へ自動車通勤したのであるが此緊急果敢な処置は当時の庶務課長松川嘉平君（現在弁護士）の臨時費用を顧みぬ英断とも云うべく其当時の手製の写真三、四葉を見て懐古の念禁じ難いのである。

船名	重量屯数	造船年月	造船所
和蘭丸	9,100屯型	大正8年12月	川崎重工
いんでぁあ丸	9,100〃	〃 9年4月	〃
おはいお丸	9,100〃	〃 9年4月	〃
伊太利丸	9,100〃	〃 8年9月	〃
三重丸	5,000〃	〃 8年9月	鳥羽造船
ていむす丸	9,100〃	〃 9年6月	川崎重工
せいぬ丸	11,000〃	〃 9年8月	播磨造船
呉福丸	9,100屯型	大正7年8月	川崎重工
東亜丸	11,000〃	〃 9年4月	〃
智利丸	9,100〃	〃 8年4月	〃
ポートセド丸	9,100〃	〃 8年7月	〃

大正10年頃の小麦積取船名表

此様な苦労を重ねつつ埠頭現場主任者鷲津原祐君（熱燗好きで鷲津燗と評判された）の采配宜敷を得て現場作業船積作業は大体予定通り進捗したがロンドン支店要請の品質及重量に対する証明書を取付けるためロイド代理店和記洋行及東連万国商業会議所（宝隆洋行）との交渉が難航を極め、相当多量の一定量を試貫する一方ロシヤの品質検査器「ゾロ秤」を持ち出しロット毎に品質の検査をする等村上孝造君初め関係者全員苦しめられたものだが此商売に対する英国側の嫉妬に外ならずと推測、憤慨した事等が思い出される。

此大きな商売も大連支店としては

浜田正稲満洲総支配人の許に沢本嘉春と云う豪放な主任者が居ったのと支店各部課の主任者が明朗で良く呼吸が合って居ったため出来たものだと当時の営業担当者として今更ながら泌々と思うのである。

考えて見ると小麦満載船が八、九カ月間三十数隻次々と大連港からポートセドオーダーとして欧洲に向ったが偶々船舶の写真が有ったので別掲する。

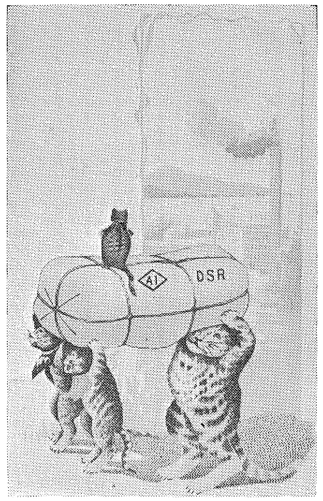
此外に大豆の積載船も数隻あったと心得るので当時の大連埠頭の船積荷役は時々は鈴木デーの観を呈した。此間大豆満載船（ニューヨーク丸か浮島丸か船名をハッキリ覚えぬ）が香港出帆後消足を断ち行方不明との悲報に接しショックを受けたが小麦積載船はその様な惨事の起らない様にと念じつつ積出に努めた事が思い出される。夫れまで大連港よりは年間数千屯の小麦を日本向け積出するのが精々であったのを考えるとまるで桁違いであるし、満鉄当局も斯んな品質の揃った良質（百三、五ナゾロトニックありウクライナ、アルゼンチン産に次ぐ良質と聞いた）の小麦が多量北満に生産される事を今更ながら認識したため大豆に倣い小麦の混合保管制度を創設すべく早急に講習会を開く等研究を重ね大正十年秋実施に移したが此制度は遂に活用されず終ったのを見ても満洲小麦の大量輸出は空前であって絶後かも知れぬ。

小麦積取船は前記の外にも諸船が有ったと村上孝造、丹治友城両君より態々知らせて頂いた。

関門一昔話

杉村馬太郎

たつみ五号に掲載された本家前の古い写真や前号の箕面公園に於ける社員一同の写真を拝見し、かれこれと往事を回顧し感一入深い何物かを覚えます。ここで私が之等写真の皆サンから思出した忘れられない珍談奇談を御披露申し上げたいと思います。この写真を見るにつけてついお家さん、岩蔵さん、さては柳田サンの御笑顔が頭に浮んで来ましたまま



大里製糖のPRえはがき

にペンを走らせることにしました。

ここで私の略歴とでも申しますか私は明治四十三年八月入社いたしました当時は資本金五〇万円の合名会社鈴木商店で、神戸本店に一週間居て大阪出張所へ転勤同年八月に門司支店に転任（当時の支店長井原五兵衛サン其後西岡貞太郎サンに代られてから店舗も下関に新築下関支部となる）し種々と仕事の関係で昭和二年破綻の時迄同支店に在勤（当時はKK浪華倉庫）其後本店の台湾銀行に対する担保物件（主として不動産関係で銀行は蓬莱不動産KK名義で取扱われて居た）の整理や又は浪華倉庫の跡始末等の為昭和六年三月迄在勤、其後大阪浪華倉庫本社に転任昭和八年十二月同社が渋沢倉庫に合併された時私も会社へ転社した者であります事を御承知願い度い。扨これから話題の本筋に入ります。

「お家サンと岩蔵サンの事」

大正四年の晩秋お家サンが関門に於て続々と建設される諸事業をご視察のため岩蔵サン御同伴でご来関された。当時関門の地に於ける我社の勢力は第一次大戦の初期であり門司に於てサクラビール会社、大里製粉所、或は日本酒類会社等其他続々と会社創立工場建設され又は神戸製鋼所の分工場開設される等其華々しい発展振りは今更私がここで説明する迄もなくお互に当時を回顧しなつかしい限りであります。当時の下関支店長は、西岡貞太郎サンでありまして早速各工場を御案内申し上げその説明を聞いてお喜びになりました。

御視察後折角の御来関の事とて此機に何れへご遊覧願う事にしようと計った結果中津の耶馬溪と決りその案内役を西岡の奥サンと私が引受ける事となりました。そこで耶馬溪へ行くなら深耶馬溪迄行って、昔から曽て斧を入れた事のない古色蒼然